

氏名	白井 順
学位の種類	博士 (中国学)
学位記番号	博乙第28号
学位授与年月日	2011年3月18日
審査研究科	文学研究科
論文題目	近世東アジアの講学と躬行―書誌的分析を中心に―
論文審査委員会	(主査) 大東文化大学教授 三浦 國雄 (副査) 大東文化大学教授 池田 知久 (副査) 大東文化大学教授 林 克 (副査) 東海大学教授 田尻祐一郎

白井 順 博士学位論文 審査報告

白井氏は、1993（平成5）年4月、東洋大学文学部中国哲学文学科に入学し、1997（平成9）年3月、同学科を卒業、同年4月、立命館大学大学院文学研究科前期博士課程東洋思想専攻に入学し、1999（平成11）年3月、同専攻を修了して修士の学位を取得した。引き続き同年4月、大阪市立大学大学院文学研究科博士後期課程中国文学専攻に入学し、2003（平成15）年3月、同専攻を単位取得退学した。その間、2001（平成13）9月に同専攻を休学し、中国政府高級進修生として重点大学のひとつである武漢大学哲学系に留学し、翌2002（平成14）年9月に同専攻に復学している。2010（平成22）年4月には、九州大学大学院人文科学研究院助教に採用され、現在に至っている。その間、研究を積み重ね、このたび、博士学位請求論文「近世東アジアの講学と躬行―書誌的分析を中心に―」提出の運びとなった。

1. 論文の要旨および特色

白井氏の学位請求論文は、中国思想史上のある特定の人物一人に焦点を絞って論じたものではなく、また特定の時代や中国という地域に限定されたものでもない。そのタイトルに示されているように、中国を核としつつ「近世東アジア」に枠を広げ、そこで展開された思想的事象を「講学」と「躬行」という観点から捉えようとしたものである。ここで云う「東アジア」は中国・日本・朝鮮を指し、「近世」は、中国では宋・元・明・清、日本では江戸時代、朝鮮では朝鮮王朝時代であるが、その光源は明にあって、その明代の思想・学術（すなわち広義の明学）のありよ

う、そして、そこから発せられた光が日本と朝鮮にどのように届き、どのように受け止められたかを考察している。

本論文のキーワードは、これもタイトルに明示されているように「講学」と「躬行」である。「講学」という語は先秦時代から学習や学問研究の意味で使われてきたごく普通の語彙であるが、明代には独特の意味付与がなされ、社会の表舞台に躍り出てくる。すなわち、そこで云う「講学」とは、知識人が定期的に集まって特定のテーマのもとで行なわれる公開の研究会ないし討論会を云い、特に陽明後学（陽明学の継承者）によって催されたそれは、民衆をも巻き込んで熱気を孕んだ一種の思想運動の様相を呈し、明代末期には政治的危機感を抱いた政府が禁令を出したりした。「躬行」は、躬=身の行ない、すなわち実践を意味する儒教的タームとして、たとえばすでに『論語』に「躬、君子を行なう」（躬行君子）という古典的用例があるが、この語がクローズアップされてくるのは、朱子学が登場する宋以降のことである。その場合、この対極にあるのは、日常の道徳的行為を閑却し、もっぱら理、性、命といった形而上学的諸問題を巡る議論に耽っているあり方である。白井論文は、この二つのタームをクロスさせ、書誌的アプローチを駆使して「近世東アジア」の思想状況を再構築しようとしたものである。大部分は既発表論文が基になっているが、前篇第二章（『読書録』）と後篇第二章（呂維祺）には大幅な改訂と補充が施され、前篇第三章（『小学』注）は新稿で、後篇第三章（蟹養斎）は、本論文提出段階では未発表であった。論文は以下のように構成されている（節題は省略）。なお、本論文のヴォリュームは 400 字詰原稿用紙換算約 750 枚である。

序論

前篇 書誌的視座からみる講学

第一章 『朱子訓蒙絶句』の普及と伝播

第二章 薛瑄『読書録』の刊行と変容

第三章 『小学』注再考

第四章 『性命圭旨』の書誌

後篇 同時代的視座からみる躬行

第一章 陽明後学と楊応詔

第二章 河南における呂維祺の講学

第三章 蟹養斎の講学

結論

以下、上記の編・章立てに沿って内容を簡明に要約する。

序論 本論文の意図および全体の構成と、「読書」「講学」「躬行」「体認」といった本論文を

構成する重要な概念が説明される。また、本論文の主たる方法としての書誌について、「思想史研究というよりは、書誌を基盤にした間接的アプローチのように見えるが、著者の狙いは書誌情報それ自体にあるのではなく、書物は如何に読まれたか、に存在する」と述べて、自己の立場が弁明される。

本論文は、上に示したように前篇と後篇との二本の柱によって構築されているのであるが、前篇には「講学」が、後篇には「躬行」という語が冠せられているのは、前篇では全四章とも書物が直接の論題になっているのに対して、後篇では全三章とも人物が直接の研究対象に据えられているからであるが、「躬行」が冠せられている後篇の章題中に「講学」の語も使われているように、もとより両篇の内容は截然と二つに分けられるわけではない。むしろ、両概念をクロスさせて当時の思想事象を捉えようとするところに著者の本領が存するのである。

前篇 書誌的視座からみる講学

第一章 『朱子訓蒙絶句』の普及と伝播

『朱子訓蒙絶句』は、朱子学の基本概念を七言絶句でまとめ上げたメタフィジカル・ポエトリで、およそ百篇から成り、朱子の作品と信じられ、朱子学へのよき入門書として東アジア世界で歴代読み継がれてきた。この作品は一方で、朱子の親筆かどうかという真偽問題が複雑に絡んできたのであるが（朱子の文集には未収）、著者の関心はそこにはなく、「この詩篇は誰にどのように読まれ、思想世界においてどのような役割を果たし、そしてそれは講学や出版とどのように関わっていたのか」という観点から論じられる。

本詩篇は、南宋時代には高度な思想詩であったが、元代になると児童の暗唱詩に変化し、明代になると、朱子学者が自己の修養のために向き合うようになり、さらに注も附せられ続篇も創作されて、本来の詩と合わせて百五十首から成る『朱子性理吟』という書物も誕生する。朝鮮では大儒李退溪によって偽作説が唱えられたにも拘わらず、『朱子性理吟』が伝えられ、再編成された朝鮮版も刊行されて理学（朱子学）詩として受容された。日本では、山崎闇斎が『朱子訓蒙詩』（原本は朝鮮版）を刊行したものの、『朱子性理吟』ともども朱子学者の間ではほとんど読まれなかった。

第二章 薛瑄『讀書録』の刊行と変容

薛瑄（1389～1464）は明初の思想家で、宋代朱子学を継承し、明代朱子学の正統として最初に孔子廟に従祀された人物である。その代表作『讀書録』は、彼が『性理大全』や宋代の儒者の書を読み、「躬行」して感じたこと、思ったことを書き留めたノートであるが、朱子学徒の「講学」と「躬行」の手本として広く長く東アジア世界で読み継がれていった。それだけに原本は変容を被り、版本は錯綜している。著者はこの密林に分け入り、能う限りテキストを実見してその系統

を整理する一方、中国・朝鮮・日本における読まれ方の相違を追跡している。今回学位請求論文としてまとめるに当たって、第五節の「崎門と『読書録』」の部分は既発表論文にはなかった新增部分で、『読書録』の太極論や『西銘』解釈が山崎闇齋学派に大きな影響を与えたことを立証している。章末の「読書録対照表」は、各種版本の構成の違いを表にまとめたものである。

第三章 『小学』注再考

「小学」というネーミングは、四書のひとつである『大学』を念頭において名付けられたもので、『小学書』（テキスト『小学』）は朱子と門人の劉子澄によって編まれ、朱子学の盛行とともに、本書も広く長く東アジア世界で読み継がれていった。一般に本書は、童蒙のための教育書として理解されているが、『小学』に対するおびただしい注釈の検討を通して著者は、それは明の陳選の注『小学句読』が流布した故の誤解であって、本来これは日常の立ち居振る舞いの所作を教える作法書ではなく、所作をする際の心のありよう（すなわち「敬」）を説く思想書として朱子は編んだと位置づける。

著者は、『小学』注の書誌的検討を通して、明代には『小学』はすでに注を付さねば読めないほどの難解な書になっており、そのためこの時代には多くの注解書が編まれたが、その流れは三つに整理できるという。すなわち、①何士信『小学集成』、②程愈『小学集説』と王雲鳳『小学章句』、③陳選『小学句読』、であり、近世東アジアの『小学』理解と受容はこの三つの流れが絡まりあいつつ形成されたとする。本章は新たに書き下ろされたもので、400字換算150枚の長篇になっている。

第四章 『性命圭旨』の書誌

『性命圭旨』は、本論文で扱われている儒教書とは異なって、道教の内丹術（体内で不老不死の丹薬を錬る内的錬丹法）を核にして儒教・仏教をも取り込んだ、近世道教に大きな作用を及ぼした道教典籍である。にもかかわらず、その基礎的な書誌研究は放置されたままになっていて、明の万暦43（1615）年序刊の呉之鶴本が善本とされる以外、中国の内外を問わずこれといった基礎研究がなされていない。著者はこのような現状に鑑み、本邦の所蔵機関は云うに及ばず、中国大陸の複数の図書館にも出向いて多くの版本を調査し、本書の系統を、①万神系諸本（呉之鶴本ほか）と②刪補定本系とに二分した上で、多くの版本を整理し、思想的な背景にまで踏み込んで論じている。章末に諸本の「版本系統図」を掲げる。

後篇 同時代的視座からみる躬行

ここで云われる「同時代」は、現代の視点から論じるのではなく、能う限り思想家の生きた当時の人々の目線に立って、という意味で使われ、これも著者の基本的なスタンスになっている。後篇の大きなテーマは朱子学者の「躬行」の問題であるが、先にも注意を喚起したごとく、ここ

でも「躬行」と「講学」は交錯しており、「同時代的視点を反映し、当時の人が語る『躬行』から『講学』の姿を見ようとした」などと述べられている。

第一章 陽明後学と楊応詔

楊応詔は生没年未詳、1531（嘉靖10）年の挙人。明の嘉靖年間に活躍した福建省の朱子学者。福建は朱子学の祖地である。彼の生涯は、王陽明（1472～1528）と重なる一時期があり、その多感な青年期に当時新興の思想であった陽明学に触れ、夢に王陽明と出会ったという詩も書いている。彼自身は篤実な朱子学者であるが、その師呂涇野が陽明学者との間にも幅広い人脈を持っていた影響を受け、陳九川、鄒守益、王龍溪、唐順之、羅洪先といった錚々たる陽明後学と交流した。彼の人物評価の基準は「躬行」（その核心は「敬」の実践）にあり、その絶対基準の前では朱子学と陽明学という仕分けはリアリティを失うのである。彼自身も「講学」を实践したが、当時澎湃として起こり天下に広まっていた陽明後学が主動する「講学」の大部分については、陽明学を隠れ蓑にして実践（躬行）をせず空虚な議論ばかりしている、と厳しく批判している。その代表作『閩南道学源流』は、今日では福建朱子学の資料として利用されているが、著者は逆に「同時代的視座から」、ここに反映されている嘉靖年間の思想潮流を読み取ろうとする。

第二章 河南における呂維祺の講学

呂維祺（1587～1641）は、楊応詔より一世代後れて河南を中心に「講学」と「躬行」に励んだ学者で、明末の李自成の乱で捕えられ洛陽で殉死した人物。彼は河南の新安の生まれであるが、ここは朱子の祖先の出身地であり、またその近辺は北宋の二程子（朱子学の先駆者、程明道・伊川兄弟）が活躍したところである。呂維祺は初め陽明学者の孟化鯉に私淑し、ついで東林党（陽明学左派批判を行なうとともに政治批判を行なって弾圧された明末の結社）の馮從吾に師事してともに「講学」した。また、同じ東林党の鄒元標や楊東明といった当時有数の学人たちとも交流があった。そういうわけで、彼は朱子学や陽明学を超えたところに位置していたと云いうる。彼の「講学」の中身は「躬行」であり、彼が定めた「会約」（講学のきまり）には「孝弟を以て本と為し、躬行を要とす」という文言が見える。彼の「講会」（講学の集い）では、孔子や先賢の祭祀も行なわれ、『朱子家礼』（朱子が編纂した冠婚葬祭のマニュアル）や『呂氏郷約』（北宋の呂大鈞が定めた村落共同体の規約）などを重んじたところに「躬行」の人である呂維祺の「講学」のありようが見て取れる。彼は当時すたれていた冠礼を『朱子家礼』に則って行なったが、著者はその儀注（式次第）を丹念にトレースしている。

第三章 蟹養斎の講学

蟹養斎（1704～1778）は江戸中期の崎門学者で尾張の人。闇斎の高弟三宅尚斎の門人。日本思想史では、徂徠学や仁斎学を「正学」の程朱学に対立する「異学」として批判した人物として知られる。本章ではその蟹の「講学」の様相と、『小学』注の検討がなされる。崎門では『小学』

の学習が重視されたが、蟹の『小学』観の特徴は、当時一般に流布していた前述の陳選『小学句読』を徹底的に批判したことと、その『小学』注において「体認」（身と心による理解）というものを全面に押し出していることである。著者は、「体認」は「躬行」して初めて得られるものとして、蟹を「講学」と「躬行」の観点から捉えなおそうとしている。崎門派は伝統的に著作の刊行を嫌い、その学問・講義録等は筆記ノートによって（一種秘儀的に）弟子から弟子に伝えられたから、テキストの収集や校定に困難が付きまとうのであるが、著者は根気強く『道学資講』（崎門学の一大叢書）を中心に進めてきた、蟹の著作の書誌研究を本章で披露している。章末に、蟹の「活動年譜」と中村政永『道学資講』全400巻の総目次を附す。

2 , 論文審査の内容および評価

次に、本論文の評価を述べる。まず各章の評価を簡約に述べ、最後に全体の総評を行なう。

前篇 第一章 『朱子訓蒙絶句』の普及と伝播

『朱子訓蒙絶句』については先行研究がないわけではなく、朱子研究（特に伝記研究）の第一人者といってよい中国の東景南氏に短い論考があるが、東氏の関心はこの作品の真偽にあつて（結局真作と断定）、真偽問題は保留し、この作品が東アジア世界でいかに読まれていったか、という著者の視点とはまったく異なっているし、もとより著者の博引旁証と綿密な考証には遠く及ばない。

第二章 薛瑄『読書録』の刊行と変容

本書は明代以降、中国をはじめとする東アジア世界で崇敬の念をもって広く読み継がれたが、現代人の眼から見れば思想内容に新味が乏しく、研究者の食指を動かせるに至らなかった。しかし、現代的評価ではなく、「同時代的視座」に立てば、こういう書物こそ真っ先に研究されてしめるべきであった。そういう意味で、しっかりした足場を組み上げた本章は評価に値する。論文45ページ、浅見綱斎の「理」理解に関して、「所以然はネバナラヌ理、所当然はヤムニヤマレヌ理」とするのは逆である。

第三章 『小学』注再考

朱子の『小学書』は、東アジア世界であれほど広汎に読まれたにも拘わらず、中国でも本邦でも上記『読書録』同様、研究がほとんど進展していない。これも、高度な哲学的内容を備えたテキストこそ研究に値すると考えがちな研究者が、「童蒙のための作法・訓育書」という先入観に囚われて敬遠してきたのであろう。そういう意味でも、著者が本書を思想書だと位置づけたのは意義深い。そして『読書録』同様、いや、『読書録』よりも複雑な版本系統を整理した意義はそ

れ以上に価値のあることであった。ただ、思想書であるとした場合、「躬行」の問題とどのように結びつくのか、『小学』の基本的身体所作（いわゆる「洒掃応対」）にどのように取り組めばいいのか、そのあたりの説明が不親切という印象を否めない。なお、本章は新稿書き下ろしで推敲の余裕がなかったのか、原文の誤読が散見される。

第四章 『性命圭旨』の書誌

本書も、近世道教の基本典籍であるにも拘わらず、版本の整理が怠られてきた。多くの版本を実見してきた著者の書誌的検討は説得的である。①の万神系テキストに三教一致思想が顕著であるのに対して、②の刪補定本系テキストは内丹に純化しようとしている、という指摘など、思想内容に踏み込んだものとして注目される。ただ、近世儒教研究というのが本論文の基本的コンセプトであるならば、この論文をこの位置に置く意味を説明すべきであった。その突破口は実は本書それ自体の中に備わっている。著者も指摘しているように、本書の序跋には、鄒元標（①）、余永寧（①）、黄道周（②）、瞿式耜（②）といった、明末の学術・儒学界の大物が名を連ねている。ここから、「講学」と「躬行」という枠組みを、儒・仏・道の三教世界へ拡大する道も拓き得るのではないだろうか。

後篇 第一章 陽明後学と楊応詔

従来、明代思想研究に関しては、研究者の側に「始めに陽明学ありき」という前提があつて、明学は多くの場合、陽明学と同一視されてきた。実際、宋代の祖述に傾きがちな明代朱子学に比して、陽明学・陽明後学は生き生きとした創造的・魅力的な思想であるのは否めない。しかし「同時代的視座」で見た場合、明代にも朱子学は厳然と生きていたのであり、それを無視して明代思想史を正しく記述できるわけもない。著者がそういう立場から、現代的観点からすればマイナーでも、当時としては比較的メジャーであつた楊応詔を取り上げた意義は小さくはない。そして、朱子学・陽明学という仕切りを当たり前のことと考えている多くの思想史家に対して、楊応詔という事例に明らかなように「躬行」というレベルにおいては両者の仕切りはそれほど截然としたものではなかったという事実は痛棒になるはずである。

第二章 河南における呂維祺の講学

呂維祺も当時としては比較的メジャー（『明史』に伝あり）であつたが、現代では楊応詔以上にマイナーな人物である。楊応詔が南方人であるのに対して呂維祺は北方人であるから、この兩人をもって一応、嘉靖年間から明末に至る思想界の証言者に見立てることもできる。ただ呂維祺の場合、楊応詔と異なるのは、「講学」と「躬行」という文脈のなかに『朱子家礼』の実践という要素が新たに加わってきている点である。「礼」の実践は、朱子学・陽明学を問わず、儒教を標榜する限り欠くべからざるものであるから、著者による、呂維祺が実践した冠礼の儀注の復元は

大きな意味をもってくる。

第三章 蟹養斎の講学

蟹養斎も地域こそ違え、その思想史研究上のポジションは上記兩人と同じであって、個別的な論文はあっても盛んに研究されているとは云いがたい。ましてや、東アジア世界という広い場に据えて、「講学」と「躬行」という共通の枠組みのなかで論じるという試みはまだ何人によってもなされていない。そういう意味でも、本研究は貴重であり、本論文が提供する書誌情報も今後の研究にとって有益であろう。ただ、著者はここでも「講学」という語を使うのであるが、中国明代におけるそれと、本邦江戸期におけるそれとを、同質のものという前提で説明抜きに使っているのかどうか、若干疑問が残る。

総じて本論文は、①東アジア地域の個別性を踏まえつつ、その全体をひとつの文化圏とした上で、そこに「講学」と「躬行」という共通の物差しを適用して思想界の動きを相関的・有機的に捉えようとした点、②「同時代的視座」という観点を導入して、研究者からほとんど顧みられていない書物と人物を取り上げ、実証的で綿密な書誌の調査を方法的基盤に据え、従来の研究では見えなかった思想潮流を掘り起こした点、③上記とも関わるが、朱子学と陽明学という仕分けでは捉えきれない思想事象を掬い上げた点—は、新しい思想史学の試みとして評価しうるし、④各章を通じてなされている綿密な書誌的考証は、今後この方面の研究者を大いに裨益してくれるはずである。

3 , 結論

以上の審査内容と評価、および2月16日に実施した外国語試験（英語・中国語）の結果に基づき、本論文を審査対象とする学位審査委員会は、全員一致をもって本論文は博士（中国学）を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。